

---

# ぼくらの歌は、あわわわわ～

ハルメク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぼくらの歌は、あわわわあ〜

### 【Zコード】

N7527A

### 【作者名】

ハルメク

### 【あらすじ】

・ぼくたちの歌。それは命と言葉に近い。

「よつてえ！ 私は断言するつー！ あの××は肥だめの中から生まれたウンコマンだつー！ 粪野郎だ！ 露悪を信奉し、周りに毒をまき散らす煙突野郎だつー！」

とある町の商店街にあるカラオケ店の12号室にその声は響いた。マイクで拡張された声は僕たちの鼓膜を破らんばかりの音量だった。今マイクを持つて雄弁しているのが斎藤といつ名前のエロゲーマニアである。××に恐喝紛いのことをされた憂をこじのように大声を出して発散するのが斎藤の

「カラオケ」

であった。そのかわりまったく歌わない。あの歌は例外として。僕はそんな斎藤を冷めた目で見ていた。この斎藤の弁論だか主張だかは1時間は続く。待っているものにとつては迷惑であり、最初の10分間は曲選びに使うことができるが10分を過ぎると曲を選び終えそこからずつと斎藤の主張を聴かねばならないのだった。

「つまり、私たちは立ち向かわねば……」

斎藤の主張が響きわたる部屋の中でソファにきつちりと座つて文庫本を読んでいる者がいた。斎藤の声は彼の黙読する力に負けていた。彼の名前は熊内という。寄り弁大王の称号を欲しここまにしている読書がフェイバリットの男の子である。

「僕を合わせて3人の男たちは単に斎藤が主張をするからというわけでカラオケに来たわけではない。僕たちはこの場に相応しいことをするために来たのである。

「……なのだ!! はあはあ」

斎藤の主張が終わつたようである。彼は額の汗を拭うと僕たち双方の顔を見比べて頷いた。

それは斎藤の合図で、いつも締めくくつこすることを僕たちに促すものだった。

僕は仕方なく立ち上がり斎藤の元へ行つた。しかし熊内だけは文庫本から顔を外さず、ソファに座つていた。

「熊内、最後のやつやるぞ。本は後で良いだろ」

斎藤がマイクを使って言つた。しかし熊内は反応しなかつた。

「ふいー、活字中毒つていうのも大変だねー」

斎藤が僕を見て言つた。僕は曖昧な笑みを浮かべた。

「この集まりにいつたい何の意味があるんだ」

熊内が突然口を開いた。顔は文庫本から上げていなかつた。

「ぼくたちがここで論じ合つたりして傷の慰めあいをしてもあいづらは変わらずにぼくらを、狩り、に来る。弱者は弱者なんだよ」

文庫本のページが捲られた。室内は静かになつた。

「何も変えられやしない。それだけ世界が手遅れだつてことだよ」

熊内はそれから黙つてしまつた。ぼくたちは黙々と読書をする熊

内を眺めていた。

「IJの悲観論者がつ。悲観的観測しかできねえのかつ。お前こそ眞の弱者だつ

齊藤の声はマイクによつて拡張され個室に響いた。  
熊内は読書を止めよつとはしなかつた。

「齊藤、落ち着いて、」

齊藤をなだめようじぼくはそつ言つた。しかしほくは齊藤の顔を見て次の言葉を口に出せなかつた。

齊藤は涙を流していた。目を熊内に向けて見開いたまま涙を流していた。

「何をされても、自分の中に強い気持ちを持つとけよ。・・・おれらは社会的弱者じゃない！　ただ制限された崩壊寸前の仮想社会の中で弱いだけだ！　だからこれからこの状態がずっと続くわけじゃない！　解つてるのかよ！　熊内！　学校では諦めたヤツが負けなんだよ！　高みを目指せば良いんだよ！」

ぼくは熊内を見た。熊内の手は止まつっていた。しかし顔は下を向いていた。

「歌おう、ぼくたちの歌

ぼくは言つた。

齊藤がこちらを見た。

「おれは歌う。おれは弱者じゃない。高みを目指す者だ」

斎藤はマイクを握り直した。ぼくももう一本のマイクを取り口に近づけた。

「1・2・3・・・」

と斎藤がカウントした。そしてぼくたちは歌いだした。

暗い闇が迫り来る

ぼくらの希望を奪うため

闇は変幻自在の体躯を走らせる

強い心根持ち続け、あわわわあ～  
希望の光を追いかける、あわわわあ～

友よ、勇む前に負けるなよ

挫けそうにならば、この歌を口ずさめよ

ぼくらの歌は、あわわわあ～

あわわわあ～

あわわわあ～

あわわわあ～

歌い終わると斎藤はマイクを置いて個室のソファへ腰を乱暴に落とした。まだ涙は枯れていなかつた。斎藤は腕を組んで下を向いたまま動かなくなつた。

ぼくは熊内を見た。 熊内の文庫本のページは水分でふやけていた。熊内も泣いていた。熊内の唇は何かの歌を口ずさんでいるように微かに動いていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7527a/>

---

ぼくらの歌は、あわわわわ～

2010年12月10日18時21分発行